かぐや姫の嘆き

要旨

八月十五夜が近づくと、かぐや姫は泣いて、自分は月の都の人で、因縁があって人間界に来たが、この十五日には、月の都に帰らなければならないことを告白する。翁が、かぐや姫と別れるのなら死んでしまいたいと泣き騒ぐと、かぐや姫も、こんなにも親しんだ翁たちと別れて帰るのは悲しいばかりだと言って嘆く。翁の家の召使たちも悲しんだ。

構成

段落	ページ・行	段意
第一	初め〜P四九・10〈堪へがたげなり。〉	八月十五夜近くになると、かぐや姫は人目もはばからずに泣くようになった。翁がわけを聞くと、自分は月の都の人で、この十五夜には月に帰らなければならないと告白する。翁は驚き、嘆き悲しんだ。
第二	P四九・11〈かぐや姫のいはく〉〜P四九・15〈いみじう泣く。〉	かぐや姫は、短期間のつもりが、人間界に長く暮らして翁・嫗に慣れ親しみ、月にいる実の父母のことは思い出さず、心ならずも月に帰るが、翁たちとの別れが悲しいと訴えて泣いた。
第三	P五〇・1〈使はるる人々も〉〜終わり	翁の召使たちも、かぐや姫の人柄のすばらしさを慕って、物も喉を通らないほどに悲しんだ。

品詞分解と現代語訳

（表示は略号で示した。略号については略号一覧参照。）

①八月十五日　ばかり　の　月　に　出でゐ　て、　かぐや姫、　いと
副助・程度　格助・体修　格助・方向　ワ上一・用　接助・単接　副

いたく　泣き　給ふ。　②人目　も　今　は　つつみ　を
形ク・用　カ四・用　補動・八四・終（尊）語り手→かぐや姫　係助・同類　係助・区別　マ四・用　格助・対象

給は　ず　泣き　給ふ。　③これ　を　見　て、　親ども　も、　「何事　ぞ。」　と　問ひ騒ぐ。　④かぐや姫、
補動・八四・未（尊）語り手→かぐや姫　打・用　カ四・用　補動・八四・終（尊）語り手→かぐや姫　代　格助・対象　マ上一・用　接助・単接　係助・同類　係助・強意　格助・引用　ガ四・終

泣く泣く　言ふ、　「さきざき　も　申さ　む　と　思ひ
副　ハ四・体　係助・同類　サ四・未（謙）かぐや姫→翁・嫗　意・終　格助・引用　ハ四・用

しか　ども、　必ず　心　惑はし　給は　む　もの　ぞ
過・已　接助・逆確　副　名　サ四・用　補動・八四・未（尊）かぐや姫→翁・嫗　推・体　係助・強意

と　思ひ　て、　今　まで　過ごし　侍り　つる　なり。
格助・引用　八四・用　接助・理由　副助・範囲　サ四・用　補動・ラ変・用（丁）かぐや姫→翁・嫗　完・体　断・終

さ　のみ　やは　とて、　うち出で　侍り　ぬる　ぞ。
副　副助・限定　係助・反語　格助・引用　ダ下二・用　補動・ラ変・用（丁）かぐや姫→翁・嫗　完・体　係助・強意

おの　が　身　は、　この　国　の　人　に　も　あら
代　格助・体修　係助・提示　代　格助・体修　断・用　係助・同類　補動・ラ変・未

ず。　月　の　都　の　人　なり。　それを、　昔　の　契り　あり
打・終　格助・体修　格助・体修　断・終　接　格助・体修　ラ変・用

ける　に　より　なむ、　こ　の　世界　に　は
過・体　格助・理由　ラ四・用　係助・強意（係）　代　格助・体修　格助・場所　係助・強意

①八月十五日頃の月に向かって出て座って、かぐや姫は、たいそうひどくお泣きになる。②人目も今はお気になさらずに泣いていらっしゃる。③これを見て、親たちも、「どうしたのだ。」と興奮して問いただす。④かぐや姫が、泣きながら言うには、「以前にも申し上げようと思ったけれども、きっと心をお乱しになるにちがいないと思って、今までそのままにしていたのです。（しかし）ずっとそれでいられましょうか（いや、いられません）と思って、うち明けてしまうのです。私の身は、この国の人ではありません。月の都の人なのです。それが、前世からの因縁があったことによって、この世界には参上していました。今は帰らなければならないときになってしまったので、今月の十五日に、あの以前の国から、（私を）迎えに人々が参上しようとしています。避けようもなく、どうしてもおいとましなければならないので、（そのときに、翁と嫗とが）お嘆きになるかもしれないのが悲しいこと（だ

まうで来（き）　たり　ける。　今（いま）　は　帰（かへ）る　べき　に　なり　に
カ変・用（謙）かぐや姫→人間界　完・用　過・体（結）　係助・区別　ラ四・終　当・体　格助・時間　ラ四・用　完・用

けれ　ば、　この　月（つき）の　十五日（もちひ）　に、　かの　もと
過・已　接助・理由　代　格助・体修　格助・体修　格助・時間　代　格助・体修

の　国（くに）　より、　迎（むか）へ　に　人々（ひとびと）　まうで来（こ）　むず。　さら　ず、
格助・体修　格助・起点　格助・目的　カ変・未（謙）人々→人間界　推・終　ラ四・未　打・用

まかり　ぬ　べけれ　ば、　おぼし嘆（なげ）か　む　が
ラ四・用（謙）かぐや姫→翁・嫗　強・終　当・已　接助・順理　カ四・未（尊）かぐや姫→翁・嫗　推・体　格助・主格

悲（かな）しき　こと　を、　この　春（はる）　より、　思（おも）ひ嘆（なげ）き　侍（はべ）る
形シク・体　格助・対象　代　格助・体修　格助・起点　カ四・用　補動・ラ変・体（丁）かぐや姫→翁・嫗

なり。」　と　言（い）ひ　て、　いみじく　泣（な）く　を、　翁（おきな）、「こ　は、
断・終　格助・引用　八四・用　接助・単接　形シク・用　カ四・体　接助・順理　代　係助・提示

なでふ　こと　のたまふ　ぞ。　竹（たけ）の　中（なか）　より　見（み）つけ
連　八四・体（尊）翁→かぐや姫　係助・強意　格助・体修　格助・起点　カ下二・用

聞（き）こえ　たり　しか　ど、　菜種（なたね）　の　大（おほ）きさ
補動・ヤ下二・用（謙）翁→かぐや姫　完・用　過・已　接助・逆確　格助・体修

おはせ　し　を、　わ　が　丈（たけ）　立（た）ち並（なら）ぶ　まで　養（やしな）ひ
サ変・未（尊）翁→かぐや姫　過・体　格助・対象　代　格助・体修　バ四・体　副助・範囲　バ四・用

奉（たてまつ）り　たる　わ　が　子（こ）　を、　何人（なにびと）　か　迎（むか）へ
補動・ラ四・用（謙）翁→かぐや姫　完・体　代　格助・体修　格助・対象　係助・反語（係）　ハ下二・用

聞（き）こえ　む。　まさに　許（ゆる）さ　む　や。」　と　言（い）ひ　て、
補動・ヤ下二・未（謙）翁→かぐや姫　推・体（結）　副　サ四・未　意・終　係助・反語　格助・引用　八四・用　接助・単接

「我（われ）　こそ　死（し）な　め。」　と　て、　泣（な）きののしる　こと、　いと
代　係助・強意（係）　ナ変・未　意・已（結）　格助・引用　ラ四・体　副

と思って、そのこと）を、今年の春から、嘆いているのです。」と言って、ひどく泣くので、翁は、「これは、何ということをおっしゃるのか。竹の中から見つけて差し上げたけれども、からし菜の種の大きさでおありだったのを、私の背丈と同じくらいになるまでに育てて差し上げたわが子を、何者がお迎えしようか（いや、何者もお迎えすまい）。どうして許そうか（いや、許すまい）。」と言って、「私こそ死のう。」と言って、泣き騒ぐ様子は、まったくいかにもこらえきれないようである。

堪へがたげなり。
形動ナリ・終

⑤かぐや姫の　いはく、「月の　都の　人にて、父母あり。片時の　間とて、かの　国より　まうで来しかども、かく、この　国には　あまたの　年を　経ぬるに　なむ　ありける。かの　国の　父母の　ことも　おぼえず、ここに　は　かく　久しく　遊び　聞こえ　て、　慣らひ　奉れ　り。いみじから　む　心地も　せ　ず、悲しく　のみ　ある。されど、おのが　心　ならず、まかり　な　む　と　する。」と　言ひ　て、もろともに　いみじう　泣く。

⑥使はるる　人々も、年ごろ　慣らひ　て、立ち別れ　な　む　こと　を、心ばへ　など　あてやかに　うつくしかり　つる　こと　を

⑤かぐや姫が言うことには、「（私には）月の都の人で、父母がいます。僅かの期間といって、あちらの国から参上しましたが、このように、この国では多くの年を過ごしてしまったのでした。あちらの国の父母のことも思い出さず、こちらには、こうして長い間楽しく過ごさせていただいて、慣れ親しみ申し上げました。（帰るとなっても）うれしく思われる気持ちもなくて、悲しいだけです。そうではありますが、自分の本心とは違って、おいとましてしまおうとしています。」と言って、（翁たちと）一緒にひどく泣く。

⑥（翁に）召し使われている人々も、長年（かぐや姫に）慣れ親しんでいるので、別れ別れになってしまうことになるのを（思って）、性格などが上品

見慣らひ　て、　恋しから　む　こと　の　堪へがたく、　湯水　飲まれ
（みな）　（こひ）　（た）　（ゆみづ）　（の）
八四・用　接助・理由　形シク・未　推・体　格助・主格　形ク・用　マ四・未　可・未

ず、　同じ　心　に　嘆かしがり　けり。
（おな）　（こころ）　（なげ）
打・用　形シク・終　格助・状態　ラ四・用　過・終

でかわいらしかったことをいつも見てなじんでいるので、（別れて後に）恋しく思われるだろうことがこらえきれなくて、湯や水も飲めずに、（姫や翁たちと）同じ思いで悲しんだ。

学習活動のポイント

■導入

学習活動のポイント

❶「かぐや姫の生ひ立ち」の後、五人の貴公子と帝の求婚を退け、最後に昇天に至る場面であることを知る。知技(2)イ

❶「かぐや姫の生ひ立ち」の後の、五人の貴公子の求婚と難題について説明する。貴公子たちを退けた後、帝にも求婚されるが、やはり拒絶したことを説明する。「かぐや姫の嘆き」がそれに続く場面であり、求婚拒否の理由が明かされることを説明する。

【評価】 古典の世界に親しむために、作品や文章の歴史的・文化的背景などを理解しているか、確認する。

■展開

学習活動のポイント

❶「かぐや姫の嘆き」を音読する。思判表B(1)ア

❷ 敬語や省略に注意しながら、現代語訳する。知技(1)ウエ・(2)ウエ　→**「言葉と表現」1**

❸ かぐや姫の言葉を参考に、かぐや姫の悲しみの理由をまとめる。思判表B(1)イ　→**「学習のポイント」1**

❹ 翁の心情の変化を読み取る。思判表B(1)イ　→**「学習のポイント」2**

❺「月の都」と「この世界」との違いを考える。思判表B(1)エ

❶聞いている生徒には場面を想像するように指示する。学習の最後にも内容を理解したうえで、会話部分を工夫するように指導し、音読させてもよい。

【評価】「読むこと」において、文章の種類を踏まえて、内容や構成、展開などについて叙述を基に的確に捉えているか、音読により、確認する。

❷必要な言葉を補い分かりやすく現代語訳させる。敬語の種類、敬意の方向を説明し、人物関係を押さえさせる。省略を正しく補えるかは部分の解釈を指名して確認できる。敬語についても指名して、意味・敬意の方向などを答えさせる。文脈をたどりながら古文を読む力については主としてペーパーテスト（小テスト・定期考査）で確認する。

【評価】 我が国の言語文化に特徴的な語句の量を増し、それらの文化的背景について理解を深め、語感を磨き語彙を豊かにしているか、ペーパーテストにより、確認する。

・文章の意味は、文脈の中で形成されることを理解しているか、ペーパーテストにより、確認する。
・古典の世界に親しむために、古典を読むために必要な文語のきまりや、古典特有の表現などについて理解しているか、ペーパーテストにより、確認する。
・時間の経過や地域の文化的特徴などによる文字や言葉の変化について理解を深め、古典の言葉と現代の言葉とのつながりについて理解しているか、ペーパーテストにより、確認する。

❸前半の言葉からは、かぐや姫が月の都の人で、帰らなければならないこと、後半の言葉からは、それがうれしいことではないことをまとめさせ、そこからかぐや姫の心情を考えさせる。

【評価】かぐや姫の心情について、作品や文章に表れているものの見方、感じ方、考え方を捉え、内容を解釈しているか、ノートのまとめなどにより、確認する。

❹「問ひ騒ぐ」「泣きののしること、いと堪へがたげなり」「もろともにいみじう泣く」の部分を押さえながら、翁の心情の移り変わりを考えさせる。かぐや姫と翁の心の交流の様子を会話から読み取り、心情についてクラスに問いかけ、発表させる。「かぐや姫の生ひ立ち」との比較も気づいた生徒に発表させ、まとめさせる。

【評価】翁の心情の変化について、作品や文章に表れているものの見方、感じ方、考え方を捉え、内容を解釈しているか、発表により、確認する。

❺「片時の間」と「あまたの年」との言葉遣いから分かることを指摘させる。浦島太郎の例などを参考にあげてもよい。

【評価】作品や文章の成立した背景や他の作品などとの関係を踏まえ、内容の解釈を深めているか、確認する。

■まとめと発展

学習活動のポイント

❶かぐや姫の人間性がどのように描かれているか、「かぐや姫の生ひ立ち」と比較して考える。知技(2)ア　主態

❶かぐや姫の言葉が翁の心情に沿っていることを読み取らせ、「かぐや姫の生ひ立ち」では、かぐや姫の主体性がほとんど描かれていなかったことと比較させ、考えさせる。召使とのやり取りも参考にできよう。人間の情が前面に表現されていることの意味を、まとめとして生徒に問いかけ、発表させる。また、意見が出にくそうな場合は字数を指定し（一〇〇字程度）、書かせてもよい。

【評価】言葉には、文化の継承、発展、創造を支える働きがあることを理解しているか、確認する。

・進んで「竹取物語」に描かれた人物の心情などを読み取り、学習課題に沿って、かぐや姫が「この国」を去ることを嘆き悲しむ理由を考えようとしているか、発表や意見文により、分析する。

指導上の注意点

●四八ページ

問「八月十五日ばかりの月」（四八・14）とあるが、文脈から考えてここでは、次のうちどれが最も適切か。

(ア)八月十五日の満月　(イ)八月十五日以前の満月に近い月　(ウ)八月十五日以後の満月に近い月　(エ)八月十五日前後の大体満月に近い月　(オ)八月十五日の満月に似ている月

答(イ)

問「いといたく」（四八・14）の(1)「いと」、(2)「いたく」について、それぞれ文法的に説明せよ。

答(1)副詞で、「非常に」「本当に」の意。(2)形容詞「いたし」の連用形で、「ひどく」「激しく」の意。

問「人目も今はつつみ給はず泣き給ふ。」（四八・14）について、

[1]「人目をつつむ」の意味を答えよ。

[2]現代語訳として適当なものを次の中から選べ。

(ア)人目をもはや気になり申し上げずに、お泣きになる。

(イ)人目をようやくはばかられながら、お泣きなさる。

(ウ)人目も今はお気になさらずに、泣いていたい。

語句の研究

●四八ページ

14八月十五日ばかりの　「八月十五日」は底本のもとの写本も漢字表記。「はづきのとをかあまりいつか」「はちぐわつじふごにち」「はづきもち」のいずれで読んでもよい。「ばかり」はおよその範囲を表す副助詞。まだ十五日になっていない。

14月に出でゐて　「月に向かって（屋敷の奥から建物の端近くへ）出て座って」。「月に」の「に」は「出でゐる」の動作の方向を表す格助詞。ただし、これを時を表す格助詞として「（八月十五日くらいの）月の頃に」と解してもよい。また、内容から、「月に」を「月夜に」と解してもよい。

14いといたく泣き給ふ　「いたく」は、「はなはだしい、ひどい」の意の形容詞「いたし」の連用形だが、副詞とする説もある。「給ふ」は語り手からかぐや姫への敬意を表す尊敬の補助動詞。「かぐや姫の嘆き」の地の文で姫に敬語が付くのは、次の文の「つつみ給はず泣き給ふ」までで、その後は「言ふ」「泣く」と敬語がない。「竹取物語」の敬語使用が不安定であることに注意したい。

14人目も今はつつみ給はず　「（八月十五日の直前となり）人目も今はお気になさらずに」。「つつむ」は「物を覆って見えなくする」の意から転じて「人目につかないようにする、遠慮する」の意。かぐや姫は、収録範囲の以前、七月十五日の頃にも月を見て物思いに沈んでいたが、その時には心配する翁に対して「なでう、物をか嘆き侍るべき。」「思ふこともなし。」と答えていた。その時にはまだ悲しみを隠そうとしていたのである。

15何事ぞ　係助詞「ぞ」は文末にあって「…だ、…である」と訳す。「何事ぞある」の「ある」が省略された形とみてもよい。文末の「ぞ」を終助詞とする説もある。

●四九ページ

1さざざき　以前。過去の時。まえまえ。

1必ず心惑はし給はむものぞ　「きっと心をお乱しになるにちがいない。」「心惑はす」は「心を乱れさせる」。「給ふ」は、かぐや姫から親たちへの敬意を表す尊敬の補助動詞。形式名詞「もの」に係助詞「ぞ」が付いた「ものぞ」は文末に用いて強意を表す。

2今まで過ごし侍りつるなり　「今までその

らっしゃる。

(エ)人目もようやく遠慮なさらず、泣き申し上げる。

(オ)人目にも今はつき申し上げないように、泣いていらっしゃる。

答 [1]人目につかないようにする。遠慮する。 [2](ウ)

問 **「今は」（15行目）という言い方は、この前に違う事態があったことを想像させる。その事態を調べよ。**

補 **答** 「語句の研究」「参考」参照。導入の一つのヒントとして、教材に入る前に指示しておくのもよい。「月の顔見るは、忌むこと」などの、興味深い古代人の考え方などに触れることができる。

●四九ページ

問 **「さきざきも申さむと思ひしかども」（四九・1）について、**

[1]「さきざき」は、ここでは次のどれに該当するか。

(ア)ずっと先までの将来　(イ)過ぎ去った時　(ウ)つい最近　(エ)回って行くほう

[2]「申さむ」と思っていたのは、どのようなことか。

答 [1](イ)　[2]自分が月の都の人で、八月十五日の満月の夜には月からの迎えが来て一緒にままで（言わないまま）にしていたのです」。「過ごす」は、ここでは「やり過ごす、放っておく」の意。

2さのみやは　「さのみやは侍らむ」の「侍らむ」の省略と解した。現代語訳では、かぐや姫の会話文全体を敬体で訳すのが適切であろう。以下も、かぐや姫の発言は丁寧語がなくとも敬体で訳した。「やは」は反語。「そうしてばかりでよいでしょうか（いや、よくないでしょう）」。つまり、「ずっとそれでいられましょうか（いや、いられません）」の意。「さ」は前文にある、言わずにいることを指す。

2うち出で侍りぬるぞ　「うち明けてしまうのです」。「うち出づ」は「口に出して言う」の意。「ぬる」は完了の助動詞「ぬ」の連体形。動作が間違いなく完了することを示す。打ち明ける内容の核心部分は、これから言うのだが、間違いなく言うのだという意識を表す。「ぞ」は係助詞「ぞ」の文末用法。係助詞「ぞ」は種々の語に付くが、活用語には連体形に付く。

3おのが身は　「私の身は、我が身は」。「おの」は自称の代名詞。「が」は連体修飾格を表す格助詞。

3この国の人にもあらず　「に」は断定の助動詞「なり」の連用形。ラ変動詞「あり」は、ここでは補助動詞。「に（助詞）＋あり」が全体で断定を表す場合、便宜上「に」を（格助詞ではなく）断定の助動詞と考える。

3月の都の人なり　「月の都」は月の中にある都。『月の都』は、月の世界。月をよい処としてほめていう。『月宮殿』などといわれて、漢籍に、月中に宮殿があるとするのを受けているのだろうか。」（上坂信男「竹取物語全評釈」）との説もある。

3それを　代名詞「それ」と格助詞「を」とから成った一語の接続詞とみる。接続詞「それに」などと同様の成り立ち。ここでは逆接を表す。

4昔の契りありける　「昔の契り」は「前世からの因縁」。現世の生涯は、前世の行いによって決まるというインド古来の思想による。日本には仏教を通してもたらされた。

4まうで来たりける　「まうづ」は「まゐづ（参出）」が縮まった「まゐづ」が転じた語であり、「行く」「来（く）」の謙譲語。「まうで来」は「まゐでく」の転。「参上する」の意。神や貴人のいる場所へ行くことをい

帰らなければならないこと。

問「必ず心惑はし給はむ」（1行目）の主語は誰か。

答 翁と嫗（親ども）

補 翁たちに敬語の「給ふ」を使っていることに注意させる。

問「さのみやはとて、うち出で待りぬるぞ。」（四九・2）について、

1「さのみやは」の下には、どのような語が省略されていると考えられるか。

2 (1)「のみ」、(2)「やは」について、それぞれ文法的に説明せよ。

3 このときの気持ちがそのまま動作になって表れている部分を指摘せよ。

答 1「あらむ」（「過ごすべき」「過ごさむ」など） 2 (1)限定を表す副助詞 (2)反語を表す係助詞 3 人目も今はつつみ給はず泣き給ふ。

補 注で説明しているところを、更にもう一度考えさせておく。

問 ◉「この国」（3行目）「この世界」（4行目）「かのもとの国」（5行目）は、それぞれどこを指すか。

答「この国」「この世界」は人間界。「かのもとの国」は月の世界を指す。

補「この国」「この世界」は「かのもとの国」に対する同じものを指していると考えてよい。

う。ここでは人間界を敬うことになるが、翁・嫗への姫の配慮による表現である。

5この月の十五日　八月十五日。中秋の月を賞玩する風習は、中国文化、特に白居易の詩の影響を受けて、貞観年間（六三七〜六七三）以降文人たちの間から浸透した（「新潮日本古典集成」）。

5かのもとの国　「あの以前の国」。かぐや姫がかつて住んでいた月の都。

5まうで来むず　「むず」は、「む」とほぼ同義だが、「む」よりもやや強調する気持ちが加わる。

6さらず、まかりぬべければ　「さらず」はラ行四段の他動詞「避る」の未然形＋打消の助動詞「ず」。「避けられない、やむをえない」の意。「まかる」は、「出づ」の謙譲語、または「行く」の丁寧語。ここは前者。

6おぼし嘆かむが悲しきことを　「おぼす」は「思ふ」の尊敬語。「思ふ」の未然形に上代の尊敬の助動詞「す」が付いた「思はす」から「おもほす」→「おぼほす」→「おぼす」と転じた語。連用形「おぼし」が他の動詞に上接して、「（心の中で）お…になる、思い…なさる」の意。「む」は、将来に起こることを想定して、「…するこ

とになるかもしれない。そのことが」の意。

8菜種の大きさおはせしを　「からし菜の種の大きさでおありだったのを」。「菜種」は芥子菜（アブラナ科）の種。黒川本「色葉字類抄」に「芥子ナタネ」とあることなどによる。また、「芥子」は「法華経」提婆達多品などで微小な物の比喩とされる（山田孝雄・忠雄・俊雄「昭和校註竹取物語」）。「かぐや姫の生ひ立ち」の「三寸ばかり」（四六・5）とは相違する。翁の誇張した表現である。「を」を逆接の接続助詞と解してもよい。

8わが丈立ち並ぶまで養ひ奉りたる　「私の背丈が同じくらいになるまでに…」と訳せるが、現代語では「私の背丈と同じくらい…」などが自然な言い方。「現代語の語感とは逆の表現である。」（「新潮日本古典集成」）。

9まさに許さむや　副詞「まさに」は「むや」を伴って反語の意。「どうして許せようか（いや、許せない）。」と可能の意を補って訳してもよい。前の「何人か…」と共に、反語を重ねて翁の強い拒否感を表す。

10我こそ死なめ　主語が一人称なので「私こそ死のう。」と解するのがよいが、「こそ…

問　**「昔の契り」（4行目）について、**
[中]「昔の契り」とは、どのような意味か。
[難]「昔の契り」によって現世に存在しているという考え（思想）について説明せよ。

答　[1]前世からの因縁　[2]前世の業（善悪の行為）によって現世に報いを受けるという因果応報の考え方からきた仏教的な思想。

問　**「今は帰るべきになりにければ」（4行目）とは、どこに帰るのか。**

答　月の都（世界）

問　**「おぼし嘆かむ」（6行目）と「思ひ嘆き侍るなり」（7行目）の主語はそれぞれ誰か。**

答　「おぼし嘆かむ」の主語は両親。「思ひ嘆き侍る」の主語はかぐや姫。

補　「おぼす」は「思ふ」の尊敬語で、「思ひ嘆く」という複合動詞の一部を尊敬語で置き換えるやり方。「言ひ明かす」→「のたまひ明かす」、「行き着く」→「おはしまし着く」などの類。翁や嫗が主語のときには、かぐや姫からの敬意を表すために「おぼし嘆く」と尊敬語を用い、かぐや姫自身が主語のときには「思ひ嘆く」と尊敬語が用いられず、「侍り」をつけて聞き手である両親に敬意を表していることに注意する。

問　**「こは、…まさに許さむや。」（7行目）の部分に用いられている敬語を全て抜き出し、敬語の種類および誰に対する敬意表現か、答えよ。**

答　①「のたまふ」尊敬語・かぐや姫　②「（見つけ）聞こえ」謙譲語・かぐや姫　③「おはせ」尊敬語・かぐや姫　④「（養ひ）奉り」謙譲語・かぐや姫　⑤「（迎へ）聞こえ」謙譲語・かぐや姫

問　**「菜種の大きさ」（8行目）について、**
[1][易]竹取の翁が、かぐや姫を最初に見つけたとき、かぐや姫の大きさについてどのように述べられているか。
[2][中]ここで翁が「菜種の大きさ」と言っているのは、翁のどのような気持ちを表していると考えられるか。

答　[1]三寸ばかり　[2]とても小さなときから、精いっぱいの愛情と努力でかぐや姫を育ててきたという気持ち。

問　**「何人か迎へ聞こえむ。」（9行目）を現代語訳せよ。**

答　何者（誰）がお迎え申し上げようか。いや、何者も迎えすまい。

問　**「我こそ死なめ」（10行目）には、翁のどのような気持ちが表れているか。**

答　かぐや姫がこの世からいなくなるくらいなら、自分のほうこそ死んでしまいたいという気持ち。

補　「我こそ…」と言って、相手よりも自分のほうがという気持ちが感じられることに注目して「私が死ぬのがよい。」と解してもよい。

---

11 月の都の人にて、父母あり　「父母月の都の人にてあり」の「月の都の人にて」を強調して前に置いた形の文と解する（上坂信男「竹取物語全評釈」など）。「（私は）月の都の人であって、（そこには）父母がいます。」とも解せる。

12 あまたの年　副詞「あまた」は「数多く、たくさん」の意。ここでは格助詞「の」を伴って連体修飾語になっている。

13 遊び聞こえて　「遊ぶ」は、音楽・遊宴・狩猟など、日常とは別の世界のことに熱中することで、他国や異郷に赴いて過ごすことにも用いた。「聞こゆ」は、かぐや姫から翁たちへの敬意を表す謙譲の補助動詞。

13 慣らひ奉れり　「慣らふ」は、ここでは、「慣れ親しむ」の意。「奉る」は、かぐや姫から翁たちへの敬意を表す謙譲の補助動詞。

14 いみじからむ心地　「いみじ」は善悪を問わず程度の甚だしいことを表す。前に「いみじく泣くを」（四九・7）とあった。「甚だしく…だ」の「…」を文脈から補って解する必要のあることも多い。教科書の脚注は「（月に帰ることが）うれしく思われる

意する。すなわち、月の世界を信じていない翁にとって、かぐや姫が月の都に帰ることは、地上界において死んでしまうのと同じだということになる。

問 **「あまたの年」（12行目）とは、どの表現と対応して言っているのか。**

答 片時の間

問 **「片時の間」（11行目）と言って、「この国にはあまたの年を経ぬる」（12行目）と言っているのは、なぜか。**

答 天上界と地上界とでは、時間の長さが異なり、天上界の僅かな時間が地上界の長い時間に相当するから。

補 人間が神仙界などと往来する話、異郷説話では、時間の違いが重要な構成要素の一つである。浦島伝説の例などをあげて、生徒の理解を深めたい。

問 **「遊び聞こえて」（13行目）とは、ここではかぐや姫がどうしたことを述べているのか。**

答 月の世界から地上の世界へ降りて来て、今まで楽しく過ごしたこと。

問 **「恋しからむことの堪へがたく」（2行目）とあるが、具体的には、どのようなことを「恋しく」思うのか。**

答 かぐや姫の気立てなどに気品があり、愛らしかったこと。

問 **「かぐや姫の生ひ立ち」「かぐや姫の嘆き」を通して、「かぐや姫」は、どのような女性として描かれているか。**

答 美しく神秘的な月の世界の女性であるが、気立てがよく、上品で、人間的な悲しみがよく分かる女性。

問 **月の世界と人間の世界の最も大きな違いは何か、分かりやすく説明せよ。**

答 月の世界での「片時」が、人間の世界では「あまたの年」に当たるように、時間や命の長さが根本的に違うこと。

とを　「心ばへ」は、外に表れた心の働きで「性格、気立て」の意。「あてやかなり」は「上品である、高貴である」の意。「やか」は形容動詞語幹を作る接尾語。

2見慣らひて　「見慣らふ」は「いつも見てなじむ、見慣れる」の意。

2恋しからむことの堪へがたく　「恋しく思われるだろうことがこらえきれそうになく」。「む」を推量で解したが、仮定と考えてもよい。かぐや姫と別れた後の未来を想像する召使たちの心の動きに即した地の文。

2湯水飲まれず　悲嘆のために必要最小限のことさえできないことをいう。

3同じ心に嘆かしがりけり　「同じ心に」は「（召使たちが、翁・嫗と）同じ思いで」の意。

14悲しくのみある　「悲しいだけです」。ラ変動詞「あり」は、ここでは補助動詞。疑問の語や係助詞などがなく、「…ある」と連体形の文末であるのは余韻を残して詠嘆する言い方。「まかりなむとする」（四九・15）も同様。

●五〇ページ

1立ち別れなむことを　「同じ心に嘆かしがりけり。」（五〇・3）に続く。

1心ばへなどあてやかにうつくしかりつるこ　気持ち。」としたが、「とてもうれしいような感じ」と訳してもよい。実の父母のいる故郷へ帰るのにうれしくもないといって、翁・嫗への愛着を示す。

鑑賞

かぐや姫は、難題によって五人の貴公子たちを退け、さらに、帝の求愛にも応じなかった。姫は、なぜ地上のあらゆる男を拒むのだろうか。かぐや姫の正体は何者なのか。こうした疑問に答え、物語を山場へ導くのが、「かぐや姫の嘆き」の収録部分である。

この場面は会話を中心に構成されている。「泣く泣く」かぐや姫は語り続ける。自分はこの国の人間ではなく月の都の人であり、今は帰るときになったので迎えが来るというのが、かぐや姫の告白の核心部分であり、かぐや姫の正体が明かされ、天人女房譚の話の型に沿った結末への道筋が開かれる。

この場面の読み所は、明かされた秘密の内容に留まらない。別れが必然的な状況で深まる親子の情愛が重要である。かぐや姫は、これまで黙っていたのは、翁・嫗を嘆かせないためだったと言い、必ず去らなくてはならないので、翁たちを嘆かせてしまうのが悲しいと述べる。「おぼし嘆かむが悲しきこと」とあるように、かぐや姫は、翁たちの嘆きを想像して悲しむ。相手がどう思うかを思いやり、心を動かす優しい人物像が形作られる。

一方、姫から別れを告げられた翁は、激しく取り乱し、姫は竹から見つけたものの、ここまで育てた「我が子」だと誇張を交えて主張する。「かぐや姫の生ひ立ち」の「三寸ばかり」「すくすくと大きになりまさる。三月ばかり…」との相違や、反語の繰り返し、「我こそ死なめ。」という発言の激しさに注意したい。翁の言動もまた、深い情愛の結びつきを表現する。

かぐや姫は、実の父母が月にいると告げる。翁を納得させるためと読める。しかし、すぐさま続けて、翁の言葉に応じて、翁・嫗に長い間慣れ親しんだことを述べ、月に帰ることはうれしくも思わない、悲しいだけだが、しかし、「おのが心ならず」行くのだと言う。翁たちへの愛着を強調して対話の相手である翁の心を和ませ、説得するように働きかける。

かぐや姫は、前世からの因縁があったので、人間世界にやって来たと述べていた。本教科書の収録範囲外であるが、月から来た迎えの使者は、かぐや姫は罪を犯したので、翁のもとにしばらく滞在していたのだと言う。月の人かぐや姫にとって、地上の人間世界は流刑地だったが、そうした言い方を姫は翁たちに対してしない。むしろ「まうで来」と人間界を尊重している。また、かぐや姫は、僅かの期間だと思って人間界に来たが、こちらでは長い期間を過ごすことになったという。ここに、月世界と人間界との時間の流れの相違が表れている。異界での短期間が、人間界では長期間になることは、浦島伝説や爛柯の故事（「述異記」など）に共通する異界の性質である。

かぐや姫がいなくなると聞いて、召使たちも悲しむ。かぐや姫の人柄ゆえだという。姫は多くの人に愛されていた。それにしても、「湯水飲まれず」とは、かぐや姫に心を奪われている。本教材の範囲には現れないが、もう一人、姫に心を奪われている人物がいる。帝である。帝は、かぐや姫一人を引き留めるために、二千人もの兵士を翁の家に派遣する。物語は、結末に向けて、大がかりな場面を用意するのである。

参考

「かぐや姫の嘆き」収録前部

春のはじめより、かぐや姫、月のおもしろく出でたるを見て、常よりも、もの思ひたるさまなり。ある人の、「月の顔見るは、忌むこと。」と制しけれども、ともすれば、人間（ひとま）にも月を見ては、いみじく泣き給ふ。

七月十五日の月に出で居て、せちにもの思へる気色なり。近く使はるる人々、竹取の翁に、告げていはく、「かぐや姫の、例も月をあはれがり給へども、この頃となりては、ただごとにも侍らざめり。いみじくおぼし嘆くことあるべし。よくよく見たてまつらせ給へ。」と言ふを聞きて、かぐや姫に言ふやう、「なんでう心地すれば、かくものを思ひたるさまにて、月を見給ふぞ。うましき世に。」と言ふ。かぐや姫、「見れば、世間心細くあはれに侍る。なでう、ものをか嘆き侍るべき。」と言ふ。

かぐや姫のある所に至りて見れば、なほもの思へる気色なり。これを見て、「あが仏、何事思ひ給ふぞ。おぼすらんこと、何事ぞ。」と言へば、「思ふこともなし。ものなむ心細く覚ゆる。」と言へば、翁、「月な見給ひそ。これを見給へば、ものおぼす気色はあるぞ。」と言へば、「いかで、月を見ではあらん」とて、なほ月出づれば、出で居つつ嘆き思へり。夕闇には、もの思はぬ気色なり。月のほどになりぬれば、なほ時々はうち嘆きなどす。これを、使ふ者ども「なほ、ものおぼす事あるべし。」とささやけど、親をはじめて何事とも知らず。

（新日本古典文学大系）